

「こんなに濡らしたら、下着の意味なんかありませんわね」

美沙の耳たぶを甘噛みしながら、由佳里が焦らすようにショーツをおろす。大量の汗と愛液で陰毛が肉土手に貼りつき、その中心を走る淫裂は離れた位置の勝にもはつきりと確認できるほどだった。

「どうですかご主人様、美沙さんのイヤらしいオマ×コは？」

「ひいっ！」

由佳里のあけすけな淫語に、美沙は悲鳴をあげてしまった。羞恥に染まった顔をそむけようとしても、由佳里に遮られてしまい、勝の視線から隠すことすらできない。羞じらう顔すら隠せないのは、若い女にとって激しくつらいことだった。それなのに、恥ずかしいのに、股の付け根はどんどん熱と湿気を増していく。それが余計に美沙を狂乱させるのだ。

「見ないでっ、こんな私を見ちゃダメえ！」

「見るなど言われてもな……」

生唾を呑みこみ、勝が美沙を凝視する。その痛いほどの視線が、美沙から羞恥の呻きを絞りだしていく。

（見てる……勝が私のアソコを……女として一番隠さなければならぬところを、全



部見られちゃってるう……」

「ああん、美沙さんがあんまり可愛いから、由佳里もなんだか変な気分ですう」

「あつやだ、おっぱいをそんなに押しつけないで……」

由佳里もその気になってきたのか、心持ち頬を紅潮させながら美沙を抱き寄せ、自分のふくよかな胸をくにくにくと押し当てている。

(やあん、由佳里さんのおっぱい、背中に当たってるよお)

長身でスレンダーなモデル体型の美沙には、由佳里のことさら豊かなバストが必要以上に気になってしまう。

美沙だって十分なサイズなのだが、由佳里とは比べものにならない。

(勝も、やっぱり大きい胸のほうが好きなのかな)

そんな美沙の葛藤を知ってか知らずか、勝が二人に近寄ってきた。美しいメイド二人の競艶にあてられたようだ。

「あん、ダメですよご主人様、手を出しちゃいけません。今は由佳里が、美沙さんと愉しんでるんですから……ねえ、美沙さん？」

由佳里の愛撫に、美沙は返事すら満足にできない。背後から抱きかかえられるようにして、ベッドに横たえられる。

「今度は由佳里も気持ちよくしてくださいね」

自らも下着を脱ぎ捨て、美沙の顔をまたぐように腰をおろす。互いの性器を愛撫し合うシックスナインの体勢だった。

まずは由佳里が舌で先制攻撃を仕かけてくる。指でぷっくりと充血した大陰唇を捲くようにひろげ、ラフレシアのような小陰唇を剥きだしにする。小さなその花びらを舌全体を使って丹念に舐めまわす。まだ処女のような密やかな膣口や、それに比べるど大きめのクリトリス、あるかないかわからないくらいに小さな尿道口と、美沙のすべてを味わうかのように由佳里の舌が蠢く。

「ほらあ、美沙さんも由佳里のオマ×コ、気持ちよくしてくださいね。自分だけ感じるなんて、ずるいですわよ」

「うっ……うむう……んんううっ！」

それでも逃げようとする美沙の顔に、半ば押しつぶすように尻を落としてくる。美沙の高い鼻梁が、ちょうど由佳里の肉溝に食いこむ格好になった。美沙の顔面に飛沫を散らしながら、さらに由佳里の腰が落ちていく。

「はうん……いい、気持ちいい！」

美沙の愛液で口の周囲をべったりと汚したまま、由佳里が背中をのけ反らせて啼く。

「もつと、もつと擦って……ああつ、そこ、そこが感じますのお！」

「んむつ、むうん……ふぐつ、ふほおうッ」

美沙は息苦しさに顔を振りたてるのだが、それが逆に由佳里を悦ばせてしまう。鼻だけでなく、口にまで熱く濡れた媚肉が押し当てられ、擦りつけられた。同性の発する激しく濃厚な女臭に、美沙の理性がぐらぐらと揺らされる。

(由佳里さんのアソコって、こんな匂いがするんだ……)

男の匂いは、勝で知っていた。男の荒々しいものとは違うが、やはり刺激的な、それでいてどこか甘く官能的な匂い。同性という嫌悪感が、次第に美沙のなかで薄れていく。

(ううん、同じ女だからってわけじゃなくて、これが由佳里さんのだから……なのかな?)

最初はあれだけ嫌っていた由佳里に対する感情は、今日一日で劇的に変化した。勝を奪い合う関係はこれからもつづくだろうか、

(敵ではなくて……ライバルって感じかしら……)

憎むのではなく、認めつつも競い合う関係。同じ男を想う、戦友のような感情が美沙のなかで芽生えていた。